



日本絵類考

九

10
75
11



日本伝類考卷九

目錄

唐伝倭伝

画の南北二宗

書画同理

詩画同意

画質

席画

梵字の蘭

明北の涅槃图

直庵の唐

克起の鷄

探出の富士

尚信の馬

宗達光琳の竹花

應挙の卧猪

奉時道人の瓶蟹

白仙の猫 附新田の猫



風外の達摩

梅道の花卉

平安の四竹

若冲の鶴

祖仙の猿酒三輪の猿

真衣の鯉

花蘂花隠の桜

天民の病鶴

詩佛の竹

檀山人の鯢

椿年の毫

一鳳の藤刈舩

浪外の宝珠

巨勢家

毛磨家

住吉家

栗田の家

芝家

土佐家

狩野家

雪舟流

曾我家

日本佐類考卷九

唐佐倭佐

文晁重談云唐佐倭佐之今人語了了工佐將
所二派之似了倭重之稱一其他之唐佐倭佐也倭不
之以上者亦子之也為少者之倭重之稱也
之弘仁姓氏錄云雄略天皇時率四眾歸化男
龍一名辰貴善重之五世孫勒大壹惠尊亦工繪天
智天皇世賜姓倭重師又日本書紀卷廿九天武天
皇六年五月壬戌不告朝甲子勅大博士百濟人率
丹授大山下位因以封三十戶是日倭重師音持授

小下位乃封二十戸。續日本化靈龜元年五月乙巳
從六位下画師忍勝姓改為倭画師聖德太子傳云
冬十月太子為繪諸寺佛像莊嚴定黃文画師山背
画師河内画師楠魚師等免其戸課永為名業又某
師寺佛足石碑基石画佛足圖及四天王像銘云大
唐使人王玄宗向中天竺。茲國中轉法輪。回見
跡得轉画塔是第一本。日本使人黃書本其向大
唐國。善光寺得轉写塔是第二本。日本在右京四
行坊禪院壇杖見神歌。塔是第三本。從天手勝
室元年歲次己丑七月十五日至廿七日并一十三

壬辰九月十日改王寫成文室真人智努画師越田
安方画字又大和上東征傳云画五頂像一鋪金泥
像一軀六扇佛菩薩障子一具僧祥衣道興德清榮
淑善照思院等一十七人。画作人画師彫佛刻鏤鑄
写備師修文鶴碑等工手都有八十五人。日駕一艘
舟。天宝二載十二月奉帆佛像莊嚴等漢土の画標
と画くこと此の射流の盛なり又唐法といふハ
吳邦のこゝに法たりといふなり。本邦のこと
法なりといふ大和法といふなり。さ且ハ古今著
聞集にも老幼等々の殿に於前侍中寺行苑小

作して寛元三年十月の改定所のは所渡殿二棟
の障子よりの方の唐紙に七念ありて平等院
宝蓋の四季の仕屏風と二條前園白良書云長者
よきありしよしけしよ申されて取出しよしれ
よきよ又を諸大殿のは相持の屏風も皆室物
よて侍しよきんたよしよて四季の大和紙
と一月と一帖よ書てあしよしよしよしれた
よしよし清原殿の唐紙もよか切きあしよし
事しよ侍て皆よしよの紙標とよしよしよ
入本しよし唐紙ふんといしよし書法あしよし

て画の流派といしよしよし大和紙の清原の直
侍と侍て國風人物一種の辨製を定め唐紙宇多
は内幸弘仁寛平の同し成りて紙をよしよしよ
紙所よ侍しよし唐紙も亦古侍の遺韻を存し
云し
紙重沼筆考よ延喜天曆の間しよ唐紙大和紙
の紙紙よし唐紙は支那様の山水楼阁人物花卉
禽獸等と作しよしよの紙を紙よしよ高村唐紙大和
紙と稱しよしよの紙世の唐紙大和紙と稱しよしよ
よしよしよ其圖よしよしよ紙よしよしよ巨勢云

飛鳥の常則は、早く所、其運筆先哲の蹤と踏
まひ意通も亦新なり、作ら出り所の唐画大和
信、小頼高村の人情、小遠、小為、小と唐信と
書、者日、少く大和信と書、小の歳月小
多、大日弘仁の海、詩作甚せ、行、と詠歌
若、よ、と、延、よ、と、詠歌後興、以て詩
小、新、と、母、人、情、と、云、て、わ、く、く、と、い、ひ、歌、と、云、て
や、ま、と、く、く、と、い、ひ、唐、よ、め、と、云、て、ま、と、云、の、衣
あ、ま、と、其、義、こ、と、小、日、唐、信、と、い、ひ、ひ、信、は、信、女
納、之、の、枕、草、飯、小、樽、麻、ハ、め、と、信、古、今、著、聞、集、卷、一

小和漢鈔小原丸、ハ中、小水、と、わ、き、よ、小唐信と
り、き、下、よ、や、ま、と、信、と、わ、き、た、ま、あ、ま、と、云、く、と、又、ハ
た、ま、

桂林漫録、小皇朝の画法と稱へたるハ、土佐家之
唐土の画法と學ひ、ハ、待所、家、なり、今の唐画
書、な、者、の、準、据、と、す、所、ハ、明、画、の、凡、ハ、唐
画、の、古、と、學、ハ、者、ハ、信、へ、て、な、り、と、唐、流、其、法、印、の
物、語、な、り、ま、な、り、と、探、出、出、り、と、待、所、家、の、凡
一、書、と、所、留、英、雄、人、と、歎、く、の、と

惠の南北二宗

惠禪室隨華小禪家有南北二宗在時始分惠之南
北二宗亦唐時分也但其人非南北耳北宗則李思
訓又子著色山水流傳而為宋之趙幹趙白駒伯駒
以至馬夏輩南宗則王摩詰始用渲淡一畫鈎研之
法其傳為張操荆關郭忠恕董巨米家父子以至元
之四大家亦如六祖之後有馬駒雲門臨濟見孫之
盛而北宋徽美要之摩詰所謂雲峰石迹迥出天機
筆意縱橫參于造化者東坡贊吳道子王維墨壁亦
云吾於維也無間然知言哉

竹洞重倫小近世者一家と云ふ人とも云ふ者ハ平
安の雪溪日野の政輔吾我蕭伯伊辰茶沖の輩
也且とも云ふ重洞皆古く乃とも云ふ雪溪ハ牧溪と雪舟
とも云へり故ハ雪溪と号せり蕭伯ハ未
絶筆と注し蕭伯政輔ハ重龍のや若沖ハ未
沖ハ未熟の所あり太宗の一流也ハ傳りて
て小名ハ云へりてはとも云ふやハ云ふ玉壺ハ
仙童ハ肇初テ南京の重と稱へ出てたり為と
と於南北相雜して専の南重といひしハ一
テ柳里茶池大雅平安の四竹備長庚の輩也而

一テ南京の面目始りて傳りて云々又南京の祖
ハ唐の王維字ハ摩詰鞏川と号す一人と祖り
け人ハ品甚高く凡俗と云ふけ出さる人なりハ
真重品のけりりりりり其流と云ふ人
ハ皆古人隠逸の徒なり南京ハ世々高品と云
て云々宋の董源北苑と号す一人と中興の
まはり宋の又子元の四大家明の沈文等なり清
ハ云々王蒙皆ハ徒を考へて北京ハ唐の李將
軍思削と初祖りて後世其を考へて次々者ハ宋
の画院の徒なり云々

此ありとてハ自己の重カとありとてハこれに
李白華紫柘軒難繼云余昔与沈無回論畫曰必
先多讀書讀書多見古今事象多不極快者見分自
然胸次浩蕩山川靈奇透入性地時一灑落何意不
臻妙といふハ通快の論なりともことハ其通
理なり終極の事程一致なりといふハ筆跡如如と
浮々多能く故ハ初學ハ先ハ臨摹一三昧なり
性靈集又曰聞之師曰臨者不字者不臨と
見内字者ハ臨者といふハことと希ふのみ

詩画日意

文晁重語二詩と画との意味大抵目と着一心と
用ひの所口一故ハ東城ハ摩詰之詩詩中有画
画中有詩といふ又鄭後王主簿画折技二論画
以飛似見与兒童陳賦詩必似詩定非知待人詩画
本一律天工与清新迴寫雀子生趙昌花侍神如何
此兩幅疎淡合精句誰言一點紅解弄每迎春と云
又款云盤車圖詩二古画之意不画形梅詩咏物無
隱情忘形得意永者寡不若見詩如見如と云へり
又東城ハ韓幹画馬詩ハ云々韓生画馬真是馬蘇

子作詩如見重世無伯樂亦無韓此詩北風誰尚者
と又云く少陵翰墨無形畫韓幹丹青石法待此画
此詩今已矣人間駕驥漫爭馳と又云く善画者画
意不重形善形者道意不道名といへる曾柔山の
詩の詩に陶公毛穎果何用素影写出無声詩と画
のこころは不語の詩も無声の詩もいへる何
れと詩画を同しとせたり秋の英実存るは
画者同詩といふ詩に要領詩真如君画一日横
超因象外妙在不言中珠蚌照滄海王塔行碧空安
能記唐法握筆話云風と白雲集より趙吳興序

と此詩を李長蘅阮山村なり日詩のくくく
日詩あり口くく宋末元初の人なり

やうに書たゞいゝも面白く画法も一さうそ
ろりぬくこゝゆふとせしむる画の待たせ
且能備ふもきれいなものつけあゝ只名画古画
たゞの賛もまじりむしやくとせしむる

席画

席画ハ席上にて画く位なりといひよる者の人の
席上よりハ書画多しとの席上より画くを中
林竹圃の画論ハ又ハ席画の画道と書しること
甚し々の席上の画よりハそのいと高人逸士
一時の興ハ素一々こゝろを親と写し出さるるも
のなまじり平生ハ掃きて不用念の他も出さるる
そのやう古く席上の画をかくさるるよりハけり
さ且と多しハ古人有宴席ありの事形とて時の
席画ハいつそのいと多しハ方丈牀門の家画者と

言して席よりて、重くして重者其の人の色を覆
い好くも應じて、重き出くとも、重竹の足所らあ
らんと昔末の顧殿之帝小橋小登りて折と去
る其の重く所い、妻子承くたりとも、又とも
しう申す、寒暑陰雨表忠哀乐、か筆と掃とそ
く古人心と信事小用、の深きを、
あらん重史の席重い、つらき事、事、重者
と書き、けい法と、けい人の一、一、
さ、卑劣心と生、好、梅、竹、洞、
ふ、ところ、大、程、あ、れ、
我、國、の、重、工、大、橋、席

重と、め、
く、
法と、
席、
凡、
諸、
い、
値、
く、
餘、

の折筆にて画きたるに、賓客各持帰して、其日
世に留存之法、目錄脚金と消して、画師の蘇
小婿、なるも夫も、画師の更、画きて、かきむる
なり。

梅小席、画の竹洞の流の如く、于位権門、下堀ひる
の志とて、ことと画、必画通を言さし、これ
と其志あり、され、更、小喜、年、の、さ、り、却て
画才と、善、よ、一、物、と、なり、し、亡、友、和、田、柳、亭、席、画
と、し、し、と、善、く、画、才、と、善、く、し、む、り、の、席、画、小、如
く、り、なり、一、柄、小、余、の、初、年、と、て、書、画、存、よ、出、し、し、画

き、く、る、に、此、出、席、の、画、師、の、多、く、の、画、徒、く、ま、り、し、り、
深、世、画、師、の、多、く、の、女、か、り、り、し、り、と、女、麻、廣、重、格
本、貞、秀、の、多、く、の、時、と、出、て、た、り、と

梵芳の蘭

僧梵芳ハ文明の真の一人玉眼子と号す又知是
新山林出芳華と号す西法明の雪窓と号し其
蘭と号す

徑更鄙言ハ文明の真の一人玉眼子の号す
其并ハ其号す佛像人物の彫りて牧溪款暉玉洞
なりと傲ひたり其の号す其の号す梵芳玉眼
ふと号す僧雪蘭一種の号すと造りて元の款雪
窓と号し其の号す其の号す其の号す其の号す
本朝皇史に記す其の号す其の号す其の号す其の号す

信一人なり。又元の重家傳小教書紙雪意と
早とよ〜蘭と重〜と〜と李初々需々真〜と
摘奇撰芳の小幅と造る李初こよ小跋語と如〜
極と〜とと書〜た〜と跋ハ佩文高書重傳小
載と〜と世雪意と重〜と玉畷多〜ハ其重
痛と難妙と〜と惜と〜と真器也と付つと稀
ふ〜と余ハ其〜とと跋と〜と重ハ恨〜と
と〜と可なりと

明兆の涅槃圖

明兆東福寺よあり寄涅槃の圖と作る梅ありた
ふ其側よあり明兆跋と〜と曰〜と古人涅槃の圖よ
ハ百款皆具とあり細ありと〜とあり我今跋
の存とよ一筆と法〜と〜と字と梅と又東
ら〜と東福寺所蔵の涅槃圖即〜ととと重兼安
畧と出〜とと

直庵の鷹

直庵要畧に曾我直庵紹祥子也善山水人物花竹禽獸尤工畫鷹賦色清湛筆勢如生檀石於一也世人珍之其子某亦号直庵精畫牙子玉扇亦工畫鷹岡村菘村曰世人知稱直庵畫鷹未知稱其山水又子以直庵為号而不以子直庵為佳品筆法纖勁整飾工緻与雲谷等頗畧曰松玉扇亦好手

光起の歌

朝霧田傍小写山楼曰く土佐光起の切けり
声と奈とくくくあそは所ふ新合と信ひし時哉
公卿のとり新の澤くく切けりハ光起小重
まておてあふとくく変中うてそくの番ふあふん
くく。母新一声と奈とそ声庭鳥小脚とたそ今
時くく新くく新くく。あふくく。出さ道たど
ハ光起の重うて有くく。橋窓自信、云土佐家
は新の狂ハ新ふくく。あふくく。あふたふ
光起の新の魚ハ新の飛ひ切けり。あふ光起

新くて黄とくく子孫のくけり新く黄とくく
くちりく負信云麻下社能く切くせりく小社能
声と奈く一帯則りかけり柳みとるて太の必録
くたくひくく光教もをき世の人なりくく画小
妙ありくくく弘賢は二流とくくく光教く鶴
の画と録するくくくく去年十二月相
画くくくくくくくくくくくくくくくく
たるぬまりのくくくくくくくくくくくく
賛りくくくくくくくくくくくくくくくく
漢州の山のくくくくくくくくくくくくく

ら鳴かき新の画と海くくくくくくくくく
ぬりき名家教の祖者ハ三教の一人なりくく
くまうくく一幅画賛と絶くくくくく文化十二
年正月十六日江賢

梅小寂教ハ一筆盤丹信守者忠の弟とみくく
言少進者信くくくくく信実教長の祖又ハ
藤原系國ハ云為業寂は足弟と人共有和漢才也
人号ハ大原と寂皆教人ハ光教ハ石道将監光信の
玄孫とて又ハ信古御門尉光則元和三年十月廿
三日ハ生る臺名口満丸承應三年三月十日石道

将監に任じ延宝九年天和五月廿五日利發法橋
小録一書昭々号と貞享二年四月十二日法眼小
録一之録四年九月廿五日七十五歳少して世を
終る工役家再興をりよつて

探幽の富士

任事鄙言に探幽の妙技ハ西施と見え々如く誰
のこまと美くきよき古今水墨とよて百丈
昇の字を者多しと云世多小能くハ世多小過
そのありしと号も其の造り所雲霞吞吐愛幻の
然筆墨の蹟とんき清韻象外小著。是亦
其素と無貫一氣韻とよて象形と實りよて
かの董北苑の山の神氣と清くよよハけの
如きものよや神小富士筆と云きよハけの
法格小效ハ其情款ハ浮弱くハ唯眼と

奇しくも一と云ふ高世に於て具服の士に逢ふ
る儀者なりつゝ今世の務業ハ耳聾の〜高小
ろふ小を伴ふの御座候と云ふ達を淋々〜本
朝の南宗とも云つらん

意華の臥猪

書出候上成村意華小臥猪の圖と云ふ者ありて意
華あり、所猪の如く〜と云ふ〜母小夫背
て老婆前と負ひて去る〜同く山中の
ハ稀ふ〜意あり〜此ハ於て終〜以て休
〜之と云ふ〜去りて我ハ告げ〜意
〜と月餘ありて老婆見つけて曰く我ハ家後
の竹林中ハ所猪ありて即ち〜意華直小門人兩
と堂と徑〜去皆小即ち所猪男〜林中ハ即ち
意華とと候〜と云ふ〜老婆小〜

くくせて赤い河を更ふことと云ふ一自是よりと
と後鞍百ももふと一老翁も物も卧緒のさうぢ
同じくゆふと云ふと一老翁ことと云ふと更ふと
一と云ふこと臥緒ありと病緒なりと直筆尋り
て其形と同く臥緒の女睡の才と云ふ其の態度
自誓のありて横山中うて病緒と云ふ一うまは
虫の如くと直筆尋り一と云ふと何れ外緒の形
形と云ふ再び筆と探りて一と云ふと云ふ老翁一見
こと真の臥緒なりと一驚嘆と一と云ふ

奉村道人の概墓

奉村道人の浪華のくまの因助幸上概墓と云ふ
ことと銅表一好く其の圖を作し頗ゆゑ逸人
重史の奉村道人の浪華のくまの因助幸上概墓と
小史のくまの山水の法を傳へて又其のくまの概墓と
して墓を海に懸けんと云ふこと

白狐の猫 附新田の猫

白狐の猫は一種の猫はよきと信じてとて薩
菜の呪いをする

遠く東史よ白狐の竹家のくまりと又
姓氏とも評ふる猫思を事をもて存あり市
中と漫りて其の由と来しるその
と俗致菜の呪いとてりしは秋は洲白狐と数子
せと

武江年表小東尾巻云明和女永の以氣陰猫の伝
りしとて市中と歩行とて常州のとのあり

名と雲ありしり

一 活一書よ天原直政の白仙とつゝもこの年
二十ふをき坊主をて出羽の秋田よ福の言何そ
願の事ありて自分福とて秋て福と序とと
更て於下とつれあつて福書つゝとつれ
かを唱入とてつゝとつれ僅の便とて更
其の福ハ兼と遊けつゝとつれことありつゝと
先なるかあつて詳つたつれ
按ふ福とありて兼達の兜とて白仙雲友の
つふありて秋田満次らの家せつゝ福と更つてこ

且と秋田の福とてつゝとつれ世へありてつれ雲の
法一凡つれ

風外の達摩

僧風外丰身の達摩と云はて一風あり時人之と
実豪と云工便覧小風外和尚曹洞宗常徳干巨州
山中越意則所行履作云達摩布袋問と自贊而
題名寛永末年寂

通兼要略ニ風外字慧薰常陸人吾相州小田原城
外山中之巖窟与心越禪師為友天徳善画人需其
画則取五并未以換之未至則後画一紙後至伊豆
在入横地七八尺許自入其中即化矣余嘗親其達
摩及布袋圖与和花堂相伯仲古画備考ニ文化元

年五月廿一日駒込高林寺小凡外師の差ありと
すて尋りし組悟の末に有之碑面小點室凡外
為知禪師ありて年月墓誌と尋之案内の所化
ニ尋りし此外師ハ南山ハ世恩山和尚と云て
應云く冬ハ高寺と逗留あり夏ハ五洲の山中
小滞し平生人の問ふ事ありハ設法と云く
近化とは方々の事ありハ四月十四日本國
坊ハ暮る物小集りし其定りて近化と云く後ハ
そへて恩山和尚ありハ口牙子一人ありニ其ハ
甲州ハ引籠りし其の方より致しし由あり

燕室凡外為知和尚正徳二年壬辰正月十七日
按ニ重工便覧ニ凡外和尚の没年と寛永年間と
ありハ非なり余屢凡外の建曆と云く皆凡
外の内印ありて時代之編比のものなり
古里信考ハ没年正徳二年とありハ信あり
又凡外ハ地と揚々其の中に入りて即此と云い
ふハ其方よりし未信考の誤の所あり

梅邊の花弁

重兼要畧に山本梅邊名亮字明卿は後人工花弁
撰筆立成媚妍秀冶 北江先生曰梅邊花弁不用
柳炭在作重疊錯離之圖自然不似市墨精巧或云
二者顧失焉

按ニ備前の入浦上春琴亦花弁の巧なる梅邊と
並稱せしむる考琴名は選字ハ十午大梅小徑と云
又山水と善くとも

平安の四竹

画乗要畧に其所爲園名奇字士常通称常之進業
儒善墨竹山科李溪名元富字洞甫業医在墨竹浅
井園南名直字維寅業医工墨竹在園中渠名常中
字延瞻称主計助工墨竹梅泉曰爲園園南等博
覧能文好作墨竹共則明人講之漢之風神有餘時
人雅賞稱平安四竹

若沖の影

若沖ハ平安の人常ニ雜教ナト書ハ日ノ其物ト
伺ハコトヲ以テ一教年ノ後ニ靜初鳴啄ノ慈ト
竊ハ其画形似ト勢之ニテ画意ト考ルハ似
テ寛政十二年九月迄モ年八十深州ノ石葦子ノ
葉ノ大典禪師ノ碑文ありて曰ク若沖居士石汝翁
字景和平安人本姓伊藤改爲玄氏又石源母近江
武藤氏以享保元紀二月生居士干城中之錦街居
士為人斷々無他技唯經書是好縱爲狩野氏之技
者遊既通其法一日自謂曰是法也狩野氏法也即

吾能之不起將野園債不如舍而之宋元也於是取
宋元畫學之臨摹累千百本又自謂日步趨之技有
終不可比耶且彼描物者耶吾又揣其所描是隔一
層矣不如親即物而紙筆也物字吾何執管今時無
有麒麟凌烟及冒雪吟詩者之態而露髮月額褊袂
之人弗堪也山水所目亦未遇上幅者無已則動植
物乎孔雀鸚鵡曾不可恒觀唯司晨之鷄回同所馴
其羽毛之彩可五彩色而吾自此始矣高鷄數十卷
下極其形狀寫之有年矣然後周及草木之英羽毛
虫魚之品悉其親會其神心得而手應其下筆賦彩

盡以意近無一毫踏襲至於古人韻致如有不合而
骨力精鍊之工可以卓然名家矣又喜用白紙易澆
者作墨畫乃用其所澆界濃淡而花之瓣与羽鱗之
次區分爲態其運筆也愚憑似暗中摸及乾劃然濃
淡不紊蓋筆之所至固熟不滯也一種風流也未嘗
有親者咸服其妙遂以此易斗米取給於是乎有斗
米庵之号然吾士質直少飾不欲以技術售世者造
丹青三十六幅實極心合度之作又摸張子恭款迹
文殊普賢三幅極大精倫無耻其本慨然以爲售
之一時不如傳身後供之世俗不如藏之名山乃足

吾族諸相國寺以充莊嚴云錦街鮭菜之肆且之員
擔者輻湊為市塞戶偏墻即居士家日租其地亦足
以為利乃居士則脫經事不欲外物混之屬家其什
而異宅焉久翦頭不食常肉無妻子欲以季其為後
先死於是圖百歲事也與里人約輟宅為里有歲分
其什貨之贏施諸相國以奉父母及它社請其子院
松鷲堂香花事既又乞松鷲之地三尺卜住校所立
碣表焉而碣之不可無銘來請于余之曰異哉可以
銘乎昔者陶潛以文自祭司空圖坐墻而賦詩王績
白居易為定寧誌皆老而自造也吾子年僅半百其

自果也如此夫雖然吾子所以求干技者名遂矣事
畢矣由斯以往將何所營乃腰不折而斗米可得優
遊以卒歲則所謂畢宰墳鬲之望知所息於今日也
且余與吾子交十有餘年自願羸弱恐不能後吾子
夫吾子之知所息與余之恐不能後是直若可以銘
然吾侪有言心如工臣師無法而不造則吾子苟擇
於自造也幸徒拙士恭所拙為得哉是真知所息矣
是為銘之曰生耶死耶刻盡而土安者此耶逝將因
歸子耶

祖仙の猿 清三篇の猿

森祖仙猿と画く小母と得く今猿の画といふ
うやうや祖仙と云ふ

逸人重史小森氏右ハ才家崎陽の人猿筆小信と
猿と云ふ重名一時小信也祖仙の猿と称
して渴望そのその方其胎瓊浦と云ふの日猿
者小松一猿と買ひ得るその日を庭樹小つ
なきおきて其侍小横臥紙筆と出く其書箱
数通あり一日信本小浄室と云ふ其書箱
の基氏の鑿と云ふ其氏甲惜しむ其の猿と

人家在音の状にて山中自在の教ありと云
ハルハハハハ又山中ハハハ切張ルハハハ西と年
終ハ其の真面目と得ルハハハ

重家人名辞書ハ森祖仙名ハ寺家字ハ叔牙祖仙
後ハ祖仙と号シ肥前長崎の人ナリ始メ重法と
山本典壽ハ學ハ如寒島又雲取庵ト号シ後大板
ハ住ハ專修ト重シ遠ハ絶妙の教ト得ルハ祖仙
平生執在飲食即チ格ハ奉初ハ做人ト云ハ文政
四年七月以テ年七十五
三編花信高ト云ク格ト重シテ名あり

送跡志ハ三編在宋子花信高住ハ江戸勸所辺林重
格傍工彫刻所帶ハ格得ハ資譽セ併謂三編寛政元
年七月七日及四谷優取各善業ト云

墓所一覽ハ寛政九年四月廿七日南寺阿勝興寺
重風學白玉齋淡名女曰クハ墓成ハ
二代ハ格身ト云
格ハ三編ハ根有彫法名工ナリそれト号門ハ也
ハハハハ其家ハ徳川家用達ハ弓師ナリト云
後重ハ梓所家の門クハハハ業條ハ教ナリト云
大師行原ハ大師堂ハハハハハ格ハ親ハハ
絶妙ナリト云ハハハハハハハハハハハハハハハハ

きくし、結の一幅と花とを頗好す。

魚の鯉

楫の魚は鯉魚と云く頗妙なり。世人多し是
を要じ

人物志に楫の魚は下俗者而人性好魚也。學者諸家
楫古画而終焉一衣箱中以龍門之鯉及梅画鳴柔
後皇國之古書常説古意而近解一書乎云古言楫
古画備考に俗稱福生也。古画門真園門よりて回
景に名あり。畫に古凡と唱へ江戸に住む

花無花隠の梅

三無花無花隠の写生と善くそ他人のなりきり
可なり其のく花隠不花隠と善くそ佳妙と稱す
速人画史ニ三無思孝居ハ正親花無と善くそ
師鳴瀧村の人好くそ梅花の写生と善くそ佳妙其
善と得てそ或人一絹本と需りて装演一坐間上
掛け一ふ双蝶和紙一其可と善くそ一と花
と善くそ直下通しハ自書氣と善くそ一のう女と
海棠と一ハ画と善くそ

其江年善くそ文政七年夏末とそ花隠と一ハ画と

詩佛の竹

文くの世文人頗る多し大庭詩佛ハ詩として其
名著の詩佛墨竹を著し詩佛の竹と稱し一時
大流行しこれより尾州の人吉崎爲圃墨竹と
よきとよきとよきと其名も

古画備考ハ詩佛ハ名ハ新字ハ天氏詩至堂瘦梅
印山書画著し其ハ俗稱大庭柳也ハ神田於五池
ニ住し天保八年没し年七十七
画兼要畧ニ常陸人移住江戸其草書ハ詩著石於
海内好画墨竹竟新可觀

香亭雅族に東坡東萊竹後人蘇做之迹也詩佛亦
能之不親不為舞臺九如先生作百芦園中有蘇
風鼓瑟妙不識古人已有之矣將先生創作之歟
按之文人重の行り——以東萊竹と号する者
頗多——唯蘭竹の——と云きて重人の列し入る者
あり詩佛の如きこと其の一人なり拙筆を以て
種々の妖怪画と云くふまこととす

檀山人の鮎

檀山人ハ下野馬場住人なり姓ハ小泉名ハ斐
檀森高ト号セ大嘗は桐宮カキヲ寫生ト好ミ意筆
の風と慕ひ鮎と云ふ巧なりを檀山人の鮎と
て世人珍賞とす

椿年の巻

大西椿年飛と書し小町守を椿年の飛とて一冊
大小行々、東東要畧と大西椿年享大壽年楚南
江戸人學南岳作山水人物家禽草虫輕鐵法易又
工虫毫後師文鼎
古虫備考一平運成堂称軒の助居津州天王橋
虫家人名辞書一幕府の小吏画と海辺南岳石文
鼎の學の遊小其毋教と書し赤永四年没と

一風の藻刈紙

森一風藻刈紙を重きく大ふ好むる藻刈紙と
かると音通一風紙といつたか音通一と
いつたかといつたかといつたか藻花の古實
下二とと需む一風紙といつたか大ふ黄白と
たるといふ藻山人の重浪花末も紙の末
耳と中ととも亦口一の後なり

混外の宝珠

新混外宝珠と云く頗妙なり

諸家之記録小用之録庵名ハ有故字ハ混外王子

全輪寺とあり

按之混外の中より中嘉永安政の頃全別と云へ
る俗あり云々宝珠と云きたる

巨勢家

巨勢家の金国とて祖となり金国ハ姓ハ紀氏
ハ巨勢中何言孫足の孫有行の子なり本朝歴史
ハ子孫ハ末女正と任そ清和天皇とて五世は朝
小歴仕一官大仙言ハ由ハ魚と似て一筋と云ハ
昔佛縁と云ハ小所ナク著皇居南の底東西の障
子と云ハ歴代鴻儒の縁と似ハ世宸殿賢聖縁の
障子と云ハ其杖素魚ハ付ハ金国の魚一家と云
ハ其杖其魚法ハ異道子と云ハ出ハ巨漕一編と撰
ふ世ハ付ハ金国の役年詳ナク云ハ云ハ云ハ云ハ

宅磨家

宅磨ハ一小宅磨又宅間証磨ハ地其の祖ト為
良ト以南部ハ法師ト有テ書苑ト以テ常則ト禁中
能屏風ハ画キ小所道凡其の色紙ハ書キト以テ
杖素画ハ侍ト有テ姓ハ藤原宅磨氏ハ祖永延中
のく巨勢弘高ト曰付ハ画キト有テ書キト有テ
有テ其の家世ハ佛依人物ト有テ書キト有テ
成テ遠古ハ行證賢良賢常賢後ト侍キ画法ト
侍ハ正和年間ト有テ其支流ハ成徳寺賢了ト侍
宏和嘉信若等ト有テ

併さるゝ者なり

栗田の家

栗田は小隆光とて祖とあり南部の法師の
養徳師顯文の隆光の孫なり其の法眼法師栗田
といふ者も暖蔵清涼寺教通念佛經起書及奥書
とあり其の技業画人傳に隆光氏の栗田といふ
通稱氏部土佐光顯の三男別と一系とあり法東
栗田といふ位も故に栗田の法眼と稱し其の傳人
物衣島と善くも寛永年間の人其の子徑光画法
と傳ふ

芝家

芝家ハ親深と云々禪と云々南都の法佛師と云
三河法眼と稱と杖素画人傳ニ親深氏ハ芝南都
ニ住一春日社画并々々々芝法眼と稱と佛画多
一永享年中の人又画家人在群書ハ親深音真興
僧於の有像と画き大衆院徑覺大僧正と云々一贊
と云々そのあま々々海平衆琳賢琳玄持經等画法
と傳ハ併画と云々一元和年同々云々
按ニ本朝画史ハ号海平衆琳賢琳玄持經等画法
由ありと云々養徳錦題文鈔ハ云々一云々一云々

たゞしつゝ

土佐家

本朝画史に土佐氏は倭画之専門也云々土佐之

倭様是有情而婉者也都其大小人面引鼻目而成

倭筆一引以成鼻目大抵於和画雖其他皆可以類

推之

文藝類纂に又土佐氏といふこと経所頼藤原経

能の孫経隆に土佐権守小任といふ其子孫土佐

と云ふ事と云ふ事

杖業画人傳小経隆画所頼と云ふ事春日と稱と先

長の男初め有房従五位下土佐権守又中務大輔

二任と業と又小委けて佛像并小菩薩の像と
くも於師窟して丹青の物とて春日曼多羅又玄
曼多羅等と云ふ工少して其名亦高し以人小
多して南都と去て京師に住して春日と改め
て土佐の籍号と唱へ建仁年中南殿賢聖障子と
画し竟在中の人

養徳顯文館ニ経陸按長安須姓藤原従五位下土
佐権守従五位下中務少輔陸親男 尊卑分脈

土佐家畧系

経陸 吉光 行光 行廣 光弘 廣周

光信 光茂 光吉 光則 光起 光成
光祐 光芳 光淳 光時 光祿 光文
光武 光章 光一

按ニ土佐家の我國画史に名録して相傳つる
甚古し世々経所領となり其の中卓筆の存在し
籍をいふ所の経陸の足春日曼光中世の光信末
世の光起のといふしてこれと土佐の三筆と云
土佐家の系圖に諸書小出の録ありて

狩野家

本朝画史ニ狩野家は漢而蕭倭者也。其狩野之家
法每物求其真、擇其止、故集前世名手所善、以為己
有、惟其主筆力故無小画、而纖柔又無細筆、而容易
狩野是画家之長、而宗族廣遠、家孫門弟之間、不乏
良才、工佐雪舟之技術、亦能筆而用之也。
故小狩野家ハ我國画師の名家也、其足利氏以
来也、相傳、徳川氏の世、由り其本家ハ江戸
中橋小伝左衛門二馬と申指狩野上り、其一族九十
有二家、而皆徳川氏に侍り、盛なりといふべし。

とて秀信とて別小一家と興さしめ其子左
男重信とて家と傳うし重信初め源四と
稱し永徳と号せしと古永徳と号して織
田信長云は侍とて後小藤装して法眼
と号して進して法印と号し又平信秀云は
信小藤法元信小初て洞色ありし其子宗也
初め匡と号し後小藤師とて一家と立
つ其子長信休偏と号し本別小一家と立つ又川
人小本村永光あり永光の子山梨村師氏と稱し
一家となり京府師とて又海北友和あり一機

袖と出でて名も稱し永徳とて長子光
信家と傳う右京進と稱し平信秀云は又
徳川家康云は信とて籠とて京師相國寺法堂
の天井小幡籠と画して書し其子永信右近
將監と稱し徳川秀忠云は別小一家と立つ
京師南禪寺法堂の天井小幡籠と画して名あり
三ふあり守信とて尚信とて安信とて本
家光信の子貞信右京進と稱し秀忠云は法
眼と叙せしとて死せしとて永信の三
男安信左衛門と名し稱し永真と号し

秀忠云小仕へて法眼小叙を〜。華力部元最水
曼小妙なり其の門下英一傑あり名もと稱せよ
又諸方光琳あり一機軸と出せ然して守信と
又の後に信き尚信ハ別小一家と多ク守信ハ末
女と稱し羅製して探出多し号と一代の女小
して狩野家中具の相と稱せし〜知れし〜画
く青芝宸殿賢聖の隣あり画き又江戸場の屏壁
と画き徳川家光云小龍と〜れ法眼と名を遊〜
て法印ニ叙せし〜其門下久淵宗系柳宗新
澤控山神足守雲あり皆丁尉の名も〜ことと探

幽門の四天王と稱し初め守信子形〜金工後反
主衆の三子と養ひて子となれ〜是と益信とい
ひ洞雲と号せ信小二子と養〜して益信と〜
て別小一家と立〜め実子吉男探信と〜て家
と信〜し石川守政圖書と稱し法眼小叙と〜
し尚信ハ主馬と稱し自道高〜号〜獨立〜て家
吏云小信〜山水と画〜小ま〜ハ水筆を用ひて
孫小仲画小妙なり其の門下片山尚宗あり元信
門下守系〜其の稱〜して名も〜し尚信の子
常信名通〜稱〜羅製〜て蒼朴と〜し徳川家

云ふはへは暇を叙せしむれば印し進み顯施色し
巧なり一時の名もと稱せしむる才信と出でて
とて狩野家の流流念城よりて狩野家の重師と
ありしこれい人としてと招聘せり狩野家は重師と
非これい人としてと家縁未きり一唱百和狩野家の
重法と責賈して措きさうふむり為ししり一
姓よりて一流と傳つし千古の題事なり狩野
家の流流念城なりと云如何とまじくわん
中敷傳の後修し其正格と破て正格と名ひ念出
て念古ふるいさし〜狩野十有三家徒し世縁

と念らして徳川氏の末年ゆゑに其法傳ふ堪
〜さうさる其間家法とすて名もと稱せしむれ
〜い養朴常信の子如川周信其の孫宗川典信洞
雲益信の後洞春景信隨川存信の後融川寛信探
出守信の後探信守道宗川典信の後伊川宗信々
々の子時川春信祖前秀信の後赤川彰信及び近
世は永真安信の後永惠立信等僅ふ八九人あり
は

狩野家の系圖の諸書よ出て〜評をれはけし
載せり

雪舟流

雪舟流ハ僧雪舟を以て祖とせり雪舟名ハ等揚
小田氏備後高と号し又赤元山主と稱せし知る者
重と信と如拙周文等も稱して學び闡き其の法
と得たる寛正年中四より入て四明山小堂至天章
中一坐とせり文和元年泊朝して周防山口の雲
谷とて住せり人物花弁造とせり善く一着山水
長とて永正二年没享年八十七秋月等韻等伯雪
洞雪村雲溪の徒皆その重法を傳へ末世とむる
雪籙雪山雪且の徒亦其の重法を慕ふ本朝重史

雪舟子是漢畫之祖筆雪舟是有操而奇者也凡
大小諸畫其意筆鋒常在中心行無表裏翻之
法就法只虛函而了凡雪舟特野同學周文而名成
一家別之者也

曾我家

曾我家ハ地号として祖々地号ハ初名武於後
小羅藝して支泉として却て其時那の人として
其の名世々武於として信周文の物き法を學ひく
物山水花鳥皆其妙を極む筆力勁健やして尋た
從墨の間小區くたれり自大家の氣象とて即
曾我一派の妙所なり付へて以て支泉の号
ハ周礼小鉄ハ泉なるを花と布として其行と泉
とりの義字及音の音衰々鉄神倫の形を
て花ひ是をとして走るとりよとるひ其の脚ハ

